Architectural Institute of Japan

5409

日本建築学会大会学術講演梗概集
（関　東）1997年9月

視深度による建築平面記述・評価の研究
茶室の平面記述

正会員 ○ 北川啓介 *1
早瀬幸彦 *2
近藤正一 *3
若山滋 *4

【研究目的】 茶室空間は作法によって、亭主の位置、客の位置がそれぞれ決められている。本研究は、平面内の特定位置の平面記述である視深度グラフを利用して、茶室平面内の座位置による視覚特性の違いを明らかにするとともに、利休による茶室の小間化や、その後の茶匠らによる茶室空間の書院化などの茶室の形態変遷を、視深度という観点から比較考察することを目的とする。

【研究方法】 本研究では、文化財として指定されている茶室を始めとし、その設計意図を探る上で重要と考えられるもの、茶匠の創意工夫が感じられる茶室38例（表1）を研究対象とし、それらの正客位置、亭主位置の視深度グラフを作成する。それらの視深度グラフにおける床、中柱、袖壁などの茶室を構成する要素や、視野空間内の人物位置などに着目し、それらのグラフの形から各茶室をタイプ化し、茶室同士の比較考察を行う（図1）。また、立体的変化である狆潜り（下部開口）は、上下による二つの視深度を持つ部分としてこれを扱う。

表1 抽出した茶室38例

		好み	畳	大目	分類	年代
1	利休好一畳大目	千利休	1	1	草庵式	
2	菅田庵	松平不昧	1	1	草庵式	1792
3	今日庵	千利休	2	0	草庵式	
4	待庵	千利休	2	0	草庵式	1582
5	中の坊茶室	片桐石州	2	0	草庵式	1648
6	利休好二畳大目	千利休	2	1	草庵式	
7	八窓庵	小堀遠州	2	1	草庵式	江戸時代
8	庭玉軒	金森宗和	2	1	草庵式	1615
9	高林庵	片桐石州	2	1	草庵式	1663
10	宗全好二畳大目	久田宗全	2	1	草庵式	
11	如庵	織田有楽	2.5	1	草庵式	1615
12	閑陰席	千利休	3	0	草庵式	江戸初期
13	澱看席	藤村庸軒	3	0	草庵式	1686
14	袁庵	如心斎	3	0	草庵式	1740
15	不審庵	千利休	3	1	草庵式	
16	松琴亭	智仁親王	3	1	草庵式	江戸時代
17	織辺好三畳大目	古田織部	3	1	草庵式	
18	八窓席	小堀遠州	3	1	草庵式	1628
19	春草廬	織田有楽	3	1	草庵式	江戸、初
20	灯心亭	水尾天皇	3	1	草、書	江戸初期
21	精香軒	前田斎泰	3	1	草庵式	1863
22	元庵		3	1	草庵式	
23	燕庵	薮内剣仲	3	1	草庵式	江戸時代
24	露滴庵	薮内紹智	3	1	草庵式	桃山時代
25	夕顔亭	小堀遠州	3	1	草庵式	1774
26	鎖の間	一条恵観	4	0	草庵式	1652
27	湘南亭	千少庵	4	1	草庵式	桃山時代
28	又陰	千宗旦	4.5	0	草庵式	1789
29	利休不審庵	千利休	4.5	0	草庵式	
30	道安好四畳半	千道安	4.5	0	草庵式	
31	飛濤亭	光格天皇	4.5	0	草庵式	江戸時代
32	霞床席	如心斎	4.5	0	書院式	1740
33	枡床席	覚覚斉	4.5	0		
34	密庵	小堀遠州	4.5	1	書院式	1619
35	向月亭	松平瓢庵	4.5	1	書院式	寛政年中
36	利休四畳半	千利休	4.5	0	草庵式	
37	精香軒	前田斎泰	3	1	草庵式	1863
38	憶昔席	薮内紹智	4.5	1	草、書	江戸時代

【平面記述の考察】

正客と亭主の視空間の比較考察

1. 床の見えかたの違い　正客の視深度では、床が浅広くゆったりとしているのに対し、亭主の視深度では不連続になる事が多い。この事から、正客位置は床を基本として定められている事が分かる。≪例外：亭主床形式（湘南亭、高林庵、春草庵、元庵）、中の坊茶室、鎖の間、憶昔亭、霞床席≫。

2. 広がり感の違い　総じて亭主空間の方が空間の広がり感が少ない。二畳以下の茶室においては、視断面面積の亭主と正客の差はほとんど見られない。狭い空間の中で正客グラフは前方への広がりにまとまりがあるのに対し亭主グラフは空間が分散する傾向が見られる≪例：待庵、今日庵、宗全好み二畳台目、例外：中の坊茶室≫。大きい茶室においては亭主グラフの方が視断面面積が圧倒的に少なく、奥行きを持つ視野方向が限定される傾向がある≪例：利休二畳台目、不審庵など　例外：利休不審庵、又陰、霞床席、清香軒、枡床席、向月亭、憶昔席≫。

3. 狆潜りによる視野の遮り　中柱を持つ亭主空間に大きく現れ、境界性を持たせたり、床や人物要素と重なって、視野の直接的到達を避ける機能をもつ。視空間を特徴付け、複雑な変化を持たせる≪例：如庵、清香軒、枡床席、向月亭≫。

4. 視深度変化　書院風茶室における棚による視空間の変化や、燕庵形式茶室において相伴席を加えたと

A Study of Architectural Plan Description and Evaluation with "Sight-Depth"
Plan Description of Tea Room

HAYASE Yukihiko, KITAGAWA Keisuke, KONDO Shoichi, WAKAYAMA Shigeru

NII-Electronic Library Service

Architectural Institute of Japan

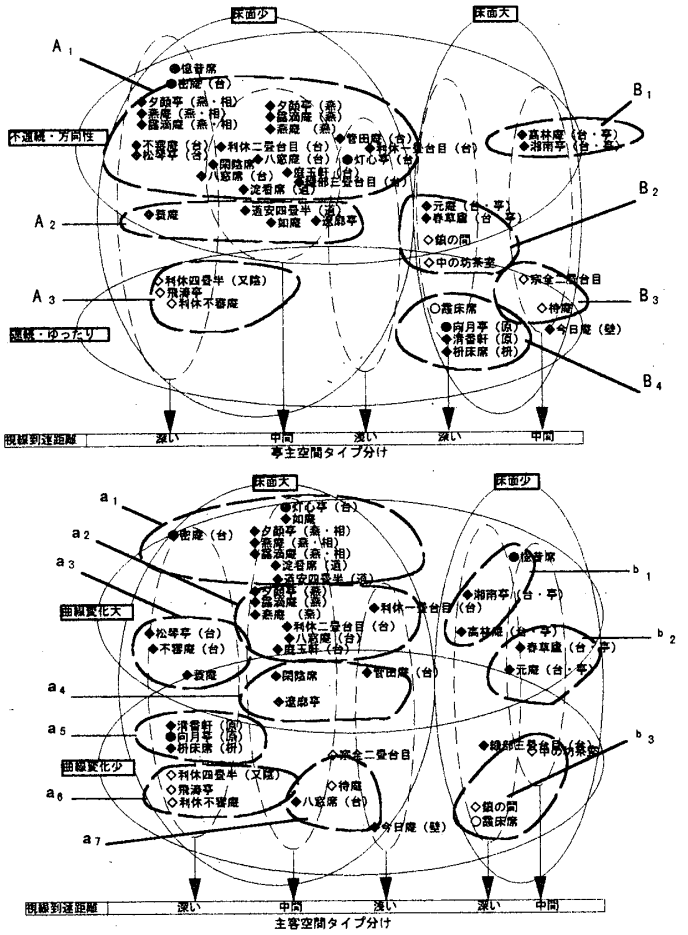
きの視空間の変化は、正客に強く現れる≪例：灯心亭、密庵、燕庵、露滴庵、夕顔亭
例外：淀看席（道安囲）、憶昔亭≫。

総じて分類すると、正客グラフには多くのタイプがあり、多種多様の設計手法が個々のグラフから伺えるのに対し、亭主グラフには視空間の一方向性という大きな流れがあり、ほとんどのものがこれに類するため、タイプは少ない。

茶室変遷との比較考察

茶室の変遷過程における考察は、概要を（図2）に示す。利休による茶室の小間化は、四畳半茶室を源として、最小の一畳台目にまで極められた。四畳半茶室では正客と亭主に床見え以外の視覚的な差は見られない(A3a6)が、台目構等の構成変化や小間化に伴い、利休好み二畳台目など（A1a2、A1a3）の正客空間は、広がりがある程度抑えられた変化に富む空間へ、亭主空間は方向性のある狭い空間へと変化した。待庵や今日庵（B3b7）のように非常に狭い空間の中では正客、亭主の視覚的な差は薄れる。その後の変遷過程をみると、より位置的に差が多く表れるもの（A1a1）や差が曖昧になるもの(A1a7、A2a3、A3a5、B2b3、B4b3）がある。特に中柱や床、棚などによる正客視深度の多様化や、亭主と正客の型にはまらない組み合わせの出現などがあるが、茶匠による明確な違いは見られない。結論

茶室の位置別の視深度グラフにより、亭主、正客の視覚的特徴が明確に表れた。亭主、正客共に視空間内における床見えの違いを基本にして、正客視深度タイプの多様性と亭主視深度タイプの集中が伺える。利休が元となる茶室設計においては、亭主の視空間の限定が客に対する謙遜の気持ちを表す事が読み取れる。その後、より開放的で自由な茶の湯が求められるとともに、特に正客の視覚において床を中心とした形態にも変化が見られる。利休以降、茶室内での位置による視覚が多様化していく事が読み取れる。



茶室形式	亭主視深度	主客視深度	
◇草庵風　中柱なし ○書院風　中柱なし ◆草庵風　中柱あり ●書院風　中柱あり	床見えが悪いもの A 1 狭く奥深い方向性 A 2 分散した方向性 A 3 変化少なく広がり大 床見えが良いもの B 1 床が浅広く、方向性あり B 2 床方向に深い方向性 B 3 変化少なく広がり少 B 4 変化少なく広がり大	床見えが良いもの a 1 変化が特に多く、広がり大 a 2 変化多く、広がりがある a 3 やや変化あり、奥深い方向性 a 4 変化少なく、広がりがある a 5 部分的変化あり、広がり大 a 6 変化少なく、広がり大 a 7 変化少なく、広がり大	床見えが悪いもの b 1 変化少なく、広がり少 b 2 変化多く、奥深い b 3 変化少なく、広がり大
（亭）…亭主床 （道）…道安囲 （台）…台目構 （原）…原叟床 （枡）…枡床 （壁）…壁床 （燕）…燕庵形式			

※燕庵形式は相伴席がある場合とない場合を別に評価する

図1　主客と亭主の視空間による分類

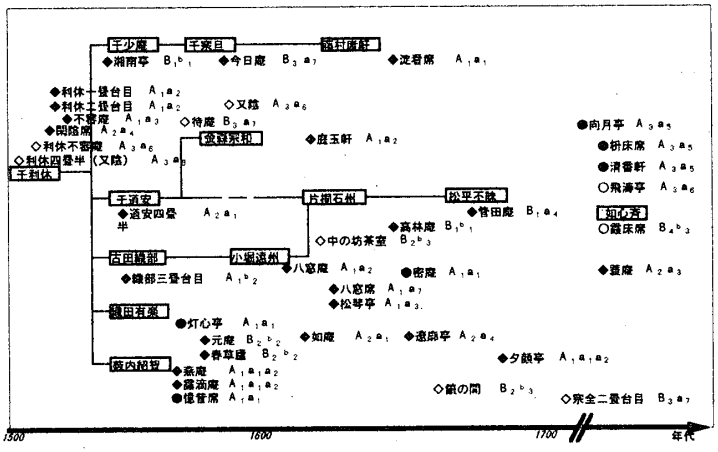


図2　主な茶人系譜図と視空間による茶室分類

*1　名古屋工業大学大学院生　Mr.s course, Nagoya Institute of Technology.
*2　久米設計株式会社・博士（工学）　Kume Architecture and Engineers Inc, Doctor Eng.
*3　名古屋工業大学助手・修士（工学）　Research Assoc., Nagoya Institute of Technology, Master Eng.
*4　名古屋工業大学教授・博士（工学）　Prof., Nagoya Institute of Technology, Doctor Eng.

NII-Electronic Library Service